

イレギュラー勇者の異 世界召喚

伝説のダンボール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サバイバル知識がある主人公が異世界に召喚されるもイレギュラーだからと雑に扱われ、なんだかんだで色々やつてく話です。

目次

召喚初日	1
冤罪と決別	5
レベル上げ	13
嬉しい再開	20
最悪の再会	24
波 第二波	34
バイオハザード編	
ラスコール街	43

召喚初日

「……ううつ、何が起きた？」

目を開けるとそこには自分を含み5人の少年達が居た。

そして目の前には、黒い……何かの教徒の様な格好（修道服？）をした男達がいちちらを見ている。

隣に居た、いかにもモテ男です！と言わんばかりのチャラそうな男は何故か槍を持っている。

他の3人もそれぞれ剣、弓、盾を持っていた。

……あれ？俺なんも持ってなくないか？

自分のことを確認してみるとさつきまで着ていた私服の右足にレッグホルスターが付いており、そこにハンドガン、腰には、見覚えのあるバックパック、左肩の辺りにはサバイバルナイフが付いていた。

装備を確認していてちゃんと聞いてなかったが、黒い修道服の人達が言うには、ここは自分達が住んでいた世界とは違う、そして自分達はこの世界を救う為に呼ば

れた四聖勇者（要するに異世界召喚ね）

但し、俺はイレギュラーらしい。

勝手に呼んどいてそりやねーだろ。

それから俺達5人はその黒い修道服の奴らに連れられてこの国の王に会うことになった。

剣、弓、槍の勇者3人が報酬がどうか言ってたし、その話もあるのか？

ちなみに俺は銃の勇者と呼ばれた。

フオーブレイという国では、銃がある様だ。

というか、黒い修道服の奴ら、俺と盾の勇者に関しての対応が雑な気がするが…。

気のせいかな？

そんな事を考えつつ、王の話を聞くことになった。

「ほう。このもの達が古から伝わる四聖勇者か。で、そのものは何だ。」

王が俺を指さす。

「はあ、ここでもか。…俺はイレギュラーなんだと。」

「…ふむ。なるほど。　ワシはこの国、メルロマルクの王、オルトクレイ・メルロマル

ク32世だ。勇者達よ、それぞれの名を聞こう。」

オルトクレイ王が俺たちにそう言うのと剣を持った奴から順に自己紹介を始めた。

「天木鍊、16歳、高校生だ。」

「俺は北村元康、21歳、大学生だ。」

「次は僕ですね。川澄樹、17歳、高校生です。」

「次は俺だな。俺は「ふむ、レンにイツキにモトヤスだな。」王様、俺達の事忘れてる！」
隣の盾の奴が話そうとした時、スルーしたのすげーわざとらしいんだが。…なんか嫌な予感がする。

王と4人が話してるときに周囲をみて思った。俺たち2人対応やつば雑じゃね？

「俺の名前は岩谷尚文、20歳、大学生だ。」

「俺は佐藤ハルキ。18歳、高校生だ。」

「さて、「スルーかよ！」この世界の事情を説明せねばならんな。」

尚文が文句をいうも見事にスルーされた。

取り敢えず、要約するところだ。

この世界では波と呼ばれる災害が起こる。

その波による被害が相当酷いらしく古の四聖勇者に助けを求めべく召喚した結果、四聖の4人とイレギュラーの俺が現れた、と。

俺みたいなイレギュラーは今まで聞いた事も無いらしい。

取り敢えず、今日は仲間を集めるから一旦解散。部屋で勇者同士親睦を深める事になった。

——勇者達、いや鍊に樹に元康、尚文この4人と話していて分かったことがある。ここに居る全員がそれぞれ別の世界の日本出身だと言うこと。

そして、尚文と俺以外はこの世界と似たようなゲームを実際にプレイした事があること。

…俺？俺は潜入アクション系とかしかやってないよ。

なんか尚文は似たようなゲームを聞いたことがあるみたいだけど。

というか、俺だけやってるゲームのジャンル違うね？

…武器もエラく近代的だし。

腰に付いてるバックパックちよつと漁ってみたけど、明らかにおかしかった。底に手が届かないもん。

これを言ったら、凄い批判くらいそうだから言わないけど。

ま、今は置いとこう。

「じゃあみんな、また明日、おやすみ。」

そう言っつて、俺は寝ることにした。

冤罪と決別

召喚された日から2日。召喚された翌日に俺達勇者に支度金と仲間を城に斡旋された。

：俺は0人、尚文は1人、他の勇者は4人前後だったが。

因みに俺としても仲間はちよつと必要無かったから都合がいいのだが。

王は俺と尚文がこの世界にあまり詳しくない、という噂が

城下で広まっていると言っていた。

若干きな臭い気がしなくも無いが、俺は黙っておくことにする。

で、俺達5人はそれぞれ別に別れ、その日はモンスターを狩って、宿に泊まって

食事をした。

食事をしていると、尚文の仲間が来たが適当に追い払うと怒りながらどっか行っ

たみたいだ。

俺には関係ないのでそのまま寝た。

「……」銃の勇者！城に同行して貰おう!!」

翌日、目が覚めた直後に俺は突然押しかけてきた城の騎士連中に連行される様に連れてかれた。

（俺は銃を持っているから銃の勇者なんだと。（この世界ではフォーブレイという国で主に銃が使われているから銃の事は知っているらしい）

俺が城の騎士達に突然押しかけて来てなんなんだ!とか言っても騎士達は「王の命令に従って貰おう」しか言わずイラツとしながら、罪人のように連れていかれた。

「……」玉座の間（自己紹介したとこ）に着くと尚文を除いた他の三勇者が来ていて、昨日適当に追い払った尚文の女が泣きながら元康にしがみついている。

「おい、王様。俺はなんかお前らにしたか？何が起きてるんだ。この状況を説明しろ!」

王様に言うとうと王様は「黙れ罪人。盾の勇者が来るまではそこでまっついていろ!」

は？いきなりこんな状況になっているのに説明も無し。しかも罪人扱い。なにがどうなってるやがる。

他の三勇者を見てもこつちを睨むばかりでなにも情報は得られないようだ。

くそっ！冗談じゃない。

そうこうしているうちに、尚文がインナー姿で俺と同じように騎士に抑えられて

いる。しかも、寝込みに盾以外のもの全て持っていかれたらしい。

なるほど。尚文は俺と同じ立場の人間か。

「おい王様！全員揃ったんだ！さっさと話を始めろ！」

——要約すると、尚文の仲間が昨日尚文に酒に酔った勢いで襲われ、なんとか逃げ出し、その後俺に助けを求めたのに、全く相手にされず追い返された。

元康はその後に助けを求める尚文の仲間を保護し、今の状況に至ると。

……ちよつとまで。俺に話かけたとき、あいつは襲われた素振りなんか全く見せなかつたぞ。しかも、助けを求めた？

あの時あいつは酒を飲もうとか言つてたはずだ。

尚文も「俺はやつてない！」と必死に言うも、王も他の奴らも全く聞き入れない。「おい！ふぎけんじゃねえ！俺はアイツに助けを求められてない！」

俺も叫ぶが全く話を聞き入れない。

王が「罪人は即刻処刑だ。」と言いやがる。

「ふぎけん！冤罪で処刑？冗談じゃない！」

尚文も「だから！誤解だつて言つてるじゃないですか！俺はやつてない！そこまで言うなら、証拠を！証拠を出せ！」と言う。

すると城の兵士が「盾の勇者の部屋を搜索した所…このような物が…ベットの
に…。」と言いながら、女物の下着を取り出した。

「…キヤア！」

「このケダモノめ！」

この国の上位陣がどよめいた。

「これが動かぬ証拠だ！」

「なんでだよ！俺が起きた時そんなもの無かったぞ！」

尚文が叫ぶも誰も聞き入れない。

「残念です。何かおかしい事になるんじゃないかと心配してたんですが。」

「勇者ならなにをしてもいいと勘違いしている。」

「俺は別に勇者だからって「お前はこの異世界の主人公なんかじゃない！身の程を弁えろ！」

クソ。さつきから俺が話す機会さえない。眼中にないみたいだ。

「ふざけるな。お前らが俺らをこの世界に呼んだ。それが何だ！冤何をしてもいいと勘違い？身の程を弁えろ？お前こそ、自分がこの世界の主人公かなかだと勘違いしてんじやねえか！」

それでもなお、俺たちへの罵倒は続いた。

そして、尚文の仲間、いや元仲間が俺たち2人に向かって舌をだし、笑った。

つ！やっぱりか！あいつは俺たち2人を嵌める気だったんだ！最初は俺を利用しようとしたみたいだが、俺の対応が使えないと分かり、元康に近づいた。尚文も気づいたみたいだ。

「騙したな！最初っから俺を嵌めるつもりだったんだろ！」

「このクソツタレ！俺が使えないって判断してすぐ、元康に近づいたって訳か！」
するとあのビッチは「怖いっ！元康様！」と元康にしがみついた。

「犯罪者が何言ってやがる！」

「ふざけんじゃねえ！どうせ俺の金と装備が目当てだったんだ！お前ら2人で示し合わせたんだろ！」

考えてみればそうだ。そもそもこの国に来た時からそうだった。扱いも雑。無視もする。

「往生際が悪い。こんなデタラメな事しか言えずに。」

「ですね。僕も同情の余地は無いと思います。」

は？何上から目線で言ってる！クソ野郎共が！

周りの奴らも「四人一度に召喚したのが不味かったんだ。

そもそも勇者かさえ怪しい奴まで出てきてるじゃないか。」

「全くだ。四人一度に召喚なんてしなれば。」

「しかし、盾とイレギュラーがそこまで卑劣だとは。」

「まただ。盾、イレギュラー、そればかりだ。」

「お前らが呼んだくせして、好き放題言いやがって。」

「盾は戦闘では使えない。イレギュラーは存在が気持ち悪い。」

「汚い。自分達に必要なではないからと。最低な奴らだ。憎い。」

「この国の連中は物事を自分のいいようにしか、解釈しない。」

「なんでこんな奴らの為に！こんな奴らの世界を守る為に！俺が命をかけなきゃならないんだ！」

「尚文も同じ事を思ったのだろう。」

「いいぜ。もうどうでもいい。さっさと俺たちを元の世界に帰せばいい。それで新しい盾の勇者でもなんでも召喚しろ！異世界？はあ!?なんで異世界来てまでこんな気持ちにならなきゃ行けないんだよ！」

「都合が悪くなったら逃げるのか。」

「自分の責務を果たさずともしないなんて。」

「ああ。帰れ帰れ、強姦野郎なんざ勇者仲間にし「黙れ！さあ！さっさと元の世界に戻せ！」」

「うむ。望み通り即刻送還したい所だが、新しく勇者を召喚するのは全ての四聖勇者が死亡したときのみと、伝承がある。」

「え？」

「なんだって!?!」

「嘘だろ？」

「このままじゃ、帰れないだど？」

「ふざけるなよ、クソが。」

「あるいは、迫り来る波を全て退けられれば元の世界への帰還も叶おう。」

「じゃあ、こんなやつらと一緒に戦わなきゃならねえのかよ……。」

「俺だつてそんな願い下げだよ。この野郎。」

「ふざけるな! だつたら俺は俺のやり方で波をどうにかしてやる!」

「どうするんだよ。波が終わるまで俺らを牢屋にでも閉じ込めておくのか？」

そしたら俺は絶対抜け出すけどな。

「投獄はせん。次の波まで猶予がない。腐つてもお前らは並に唯一対抗出来る勇者だからな。だが既に貴様らのやった事は国民に知れ渡っている。今後我が国でまともに生きていけると思わん事だな。」

「分かつてるよ!」

尚文はそう言うところからか金を取り出し、奴らに投げつけた。

「おいー！」

元康が手を掴むも尚文は「俺は弱いんでね。時間が惜しい。」そう言つて手を振り払い、城を出ていった。

「俺もだ。あんたら相手に時間を割くのはバカバカしい。俺ももう行かせてもらおう。」

俺は国を敵に回し、城を出ていった。

こうして俺は、この地獄の異世界を救わなければいけなくなってしまった。

レベル上げ

あれから2週間たった。

俺はほとんど森の中で暮らすことにしている。

あの日から俺は怪我をする恐怖も、魔物を殺すことにも何も感じる事無く、作業の様にレベルを上げていった。

そのお陰でレベルは36になっていた。

因みに、伝説の武器は銃のみ弾の威力や種類が変わる以外の変化はカスタムパーツを付けられるようになった事だ。

モンスターを倒すと時々色々なパーツが手に入る。

例えば、サブレッサーとかだ。

しかもモンスターの素材もバックバックに全部入るから、街に戻る事も基本ない。

食事は森でモンスターや動植物を狩り、それを食っている。

最近では、鑑定なんて便利なスキルも手に入り、より一層食事を調達するのが楽に

なった。

完全にサバイバルだ。

サバイバル知識も元々あったし、メトルギアでもみたような事を真似してると色々出来た。

全ての道具は現地調達だ。

レベルも上がり、出来ることも増えたおかげで、服と回復用の薬草の入手が出来た。

今は、いつ城のやつらに襲われるか分からないし、残りの勇者に出くわす可能性もあるから、技術を人型の魔物相手に練習をしている。

メトルギアのようなスニーキングもできるようになった。

これのお陰で、狩りも楽だ。

そろそろ波も近いし、尚文もどうなってるか気になるし街に情報収集に向かうとしよう。

もちろん、銃の勇者だとバレないように変装して。

変装に関しては魔物の群れに混じっていたデイスガイスとかいうモンスターを狩ったら、手に入った。

声と顔が変えられる変装というスキルが使えるようになった。

「……変装スキルを使い、怪しまれることなく街に潜入することが出来た。因みに金は初日に貰ったやつがちやんと残ってる。」

宿屋で1度使っただけだ。

この街でのやることリストを事前に考えといた。

やることリストその1、尚文の情報を集める。

その2 装備品や靴、日用品の調達。(自分で作ったりする為の参考品の入手)

その3 なぜ嵌められたかの調査

その4 他の勇者の情報を集める。(これはやってもやらなくてもいい)

その5 要らない素材の売却

ま、とりあえずこれを目安に動けばいいかな。

とりあえず、一番簡単な素材の売却から始めようかな。

それに並行して、商人から尚文の情報を集める。

よし、そうしよう。

あ、丁度冒険者が買取をしてもらっているみたいだ。

「あの、すみません。この素材買い取って欲しいんですけどー。」

俺は務めて明るい感じで、商人に声をかけた。

「はいよ。えー、これはいい素材ですね。銀貨3枚と銅貨30枚でどうですか？」
「じゃあ、それでお願いします。あ、後聞きたいんですけど、最近、この辺りに盾の勇者つて来ます？」

俺はそれとなく聞いてみた。

すると「あー、盾の勇者ですか…。」と答えた。

「何かあつたんですか？」

「そうですね。この前、盾の勇者がうちにバルーンの欠片を売りに来たんですよ。買い取ろうとしたらなんと、盾の勇者は隠していたバルーンで脅してきましたんですよ！」

「バルーン？街中で、ですか？」

「そうなんですよー。なんか外套の中にバルーンを潜ませていたみたいでして。」

「なるほど。それは災難でしたね。」

俺は商人から金を貰い次は日用品とかの雑貨を買うことにした。

というか尚文のやつ、上手いことかんがえるなあ。

その後、他の勇者の動向や雑貨の調達をある程度終わらせると、嵌められた理由の調査を始めた。…直ぐに分かったけど。

簡単にまとめると、この国の国教のせいだった。

この国の国教は三勇教。

要するに、劍、弓、槍の勇者を信仰する宗教。

そして、盾の勇者は悪魔と呼んでいた。

最初は銃は敵でも味方でもない、みたいに扱ってたみたいだけど、犯罪者に仕立てあげられると、盾と同じ扱い、すなわち宗教上の敵という認識になっていたようだ。

はあ、マジでクソだな。この国。

これで確定した。やつらとは和解は絶対にならない。

ついでに尚文がよく来る武器屋についての情報も手に入れた。

マジで変装便利だな。

武器屋か。防具買おうかな。

———考えながら歩いていると武器屋に着いた。

「へい、らっしやい！お？見ない顔だな！」

武器屋の親父さんがいい笑顔で声を掛けてきた。

「ああ、ここにはちよつとした情報と防具を買おうと思つてな。」

「情報つてなんの事だ？」

「盾の勇者がここによく来るって聞いたからさ。ちよつと話したい事があるんだよ。」

「ほう。あんちゃん、あいつになんの用だ？」

「仕事の話だ。それと親父、プロテクターを頼みたいんだが、オーダーメイド出来るか？」

「ああ、素材を用意してくれば可能だ。というか、仕事の話？あんだ、結構怪しいぜ。」

「はあ、仕方ないね。俺も事情があるんだが、盾の勇者の事件、知ってるだろ？」

「ああ、知ってるぜ。」

「もう一人、犯罪者として扱われてたやつは？」

「そつちも知ってるぜ？それとなんか関係あんのか？」

「親父、今からすること、黙っておくことは出来るか？」

「あんちゃんがお得意様になつてくれるんならいいぜ。」

「りよーかいだ。」

そう言うのと俺は変装スキルを解いた。

「は？あんちゃん、まさか…？」

「ああ、そのまさかさ。冤罪を掛けられたもう一人の勇者。俺がその、銃の勇者だ。」

「マジかよ。ココ最近銃の勇者の話を全く聞かないと思つてたら、変装して街に居たのか。」

「違うな。俺はずつと森で暮らしてた。街に帰らずに。今日ここに来たのは、あくまで情報収集だ。街に長居することはない。」

「なるほど。そういう事だったか。で、改めて聞きたいんだけど、尚文は来るのか？」

「ああ、時々来るぜ。普段通りならそろそろ来てもおかしくないな。」

「なるほど。じゃあ、ちよつと待ってていいか？」

「ああ、あんたなら歓迎だよ。」

「ありがとう。」

そうして俺は尚文が来るまで、店で待つ事にした。

嬉しい再開

俺はもう一度変装し直して、親父さんの店で尚文を待つ事にした。

――時間後尚文は来たが予想外の状態だった。

まあ、よくよく考えれば仕方ないか。

尚文は奴隷の少女を連れて、店に現れた。

攻撃の出来ない尚文が攻撃手段を求めるのは当たり前だ。

「親父、こいつに武器を新たに見繕ってくれ。」

「分かったよ。後、あんちゃんに客だ。」

「は？俺に客？」

尚文がそう言った後、俺は尚文を呼びかけた。

「2週間ぶりだな。尚文。」

尚文は俺がいる事に気付いたようだが、俺が誰か分からない用だ。

あ、そうか。変装解いてなかったわ。それじゃあ仕方ないか。俺はそう思いながら変装を解く。

「改めて、2週間ぶりだな。尚文。」

「え、ハルキか？は？さっきのはなんだ？」

「変装スキルだ。ともかく、俺はお前と話をしに来たんだ。」

「あ？今更なんの用だよ。」

「波の情報を聞きたいのと、あとは2週間どんな感じだったかの話だ。」

「ああ、いいだろう。俺も、お前が2週間何処に消えてたのか、興味がある。」

「ところで、その奴隷は？」

「戦えないから、この前買った。」

「なるほど。」

「じゃあ、こっちの番だ。お前、これまで何してた。他の勇者の話は聞くが、お前の情報は全くと言っていいほど無かった。」

「まずはそれか。俺は、この2週間、森で狩りをしながら

サバイバルしてた。」

「サバイバル？お前、そんな事出来るのか？」

「ああ、それこそそういう系のゲームをやってたお陰だな。」

「へえ。」

「じゃあ次はこつちだ。波はどこで起こる？というか具体的にいつ起こる？」
「分からん。」

すると親父さんが口を挟んだ。

「あんちゃん達、知らないのか？時計台にある、龍刻の砂時計っていうやつだ。その砂時計の砂が落ちきると、勇者たちは波の場所に飛ばされるらしいぜ。」

「そうなのか。なるほど、行ってこようかな。」

明日、装備を新調したら尚文達と一緒にに行くことになった。

その分、今日は尚文との情報交換を続けた。

因みに奴隷の名前はラフタリアだそうだ。

あと、回復薬の作り方を教わった。

代わりに俺はここ2週間のサバイバルで手に入れた素材の一部を譲った。

—————翌日

尚文達に合流してから、親父さんの店に行った。

今日にはオーダーメイド品が完成するらしい。

俺達だから、と親父さんが優先してくれたみたいだ。

確かに尚文がここに通う気持ちも分からなくはない。

「どうかハルキ、お前また変装してるのか。しかも、昨日の格好とも違うし。」

「当然だろ。怪しまれずに行動するなら、銃の勇者である事も盾の勇者と関わりがある事も隠すべきだろ。」

「はあ、まあそうなんだけどさ。」

ま、親父の店の中ではちゃんと元の姿でいるけどな。

尚文の奴隷のラフタリアさんは普段はよう喋るらしいが、俺がいる時は遠慮しているのか、ずっと黙りだ。

まあ別にいいけど。

最悪の再会

親父さんの店に着いた俺は親父さんに声をかけた。

「おはよう親父、頼んでたやつ出来たか？」

「おうよ！とつくに出来てるぜ！」

「流石だな。やつばいい職人は仕事が早いね。」

「褒めたって何も出ないぜ！」

そう言うのと親父がプロテクターとラフタリアさんの鎧と尚文の…盗賊つばい鎧（南蛮の鎧と言うらしい）を持ってきた。

「どうしたんだあんちゃん」

「いや、滅茶苦茶悪人つばい鎧だなど思ってる」

「今更何を言ってるんだ、あんちゃん？」

言いたいことは分かるぞ、尚文。

確かにそれ着ると世紀末のヒヤッハーしてそうな奴らみたくみえるかもしれないな

い。

「ナオフミ様ならきつと似合いますよ」

「ラフタリア……お前」

お、ラフタリアさんが初めて俺の前でちゃんと話してる。

「とにかく着てみてくれよ」

「うー……できれば……着たくないがせつかく作った鎧だからしょうがない」

尚文が鎧を着て戻ってきた。

なので俺は言ってる。

「尚文。似合ってるじゃん！これでお前は盗賊になれるぞ！」

「黙ってる！」

「ふむ……顔から野蠻さは感じられないが目付きで乱暴者っぽい感じになったな」

「あ？ それは俺の目付きが悪いとでも言うつもりか？」

「あんちゃんはやさぐれたっていうのが正しいかも知れねえな」

「確かに……初日からだいぶ変わったな。」

「それはお前もだろ。よく森で2週間もサバイバル出来るな。」

「慣れだよ慣れ。ま、とにかく似合ってるんだから。」

「ナオフミ様、似合っていてカッコイイですよ！」

「そういう事だ。頑張れ。」

「はあ、お前ら……。」

「まあいいじゃねえか。尚文、さつさと時計台行って来ようぜ？ あんま長居はオススメしないけどな。」

俺は三勇教に関しての話は尚文には話していない。

確証がないからだ。これに関しては、のちのち調べていくしかない。

「分かったよ。じゃあさつさと終わらせよう。」

「そうだな。じゃあ親父行ってくるよ。装備ありがとな。」

「ああ、またな！」

————ここが時計台か。思ったよりデカイな。

「ここが目的地みたいだ。」

入場は自由なのか、門が開かれ、中から人が出入りしている。

受付らしきシスター服の女性が見るなり怪訝な目をした。

「盾の勇者様と、お連れの方でしょうか？」

「俺は銃だ。」

「そうですか。」

「ああ、そろそろ期限だろうと様子を見に来た」

「ではこちらへ」

そう言つて案内されたのは教会の真ん中に安置された大きな砂時計だった。

全長だけで7メートルくらいはありそうな巨大な砂時計。

裝飾が施されていて、なんとも神々しいような印象を受ける。

なんだ？みてるだけなのになんかすごい嫌な感じがするな。これはどういう事だろうか？

ピーンと音が聞こえたかと思うと、尚文の盾と俺の銃が反応して、光が出てきて砂時計に反応する。

すると視界の端に数字が現れた。

20 : 48

しばらくすると47になった。

要するにあと20時間弱ということか。

「思ったより早かったな。」

準備は一応整つてるし丁度いいかな。

「ん？なんだ、尚文とハルキじゃねえか。」

聞きたくない声が奥のほうから聞こえて来た。

見るとゾロゾロと女ばかりを連れた槍の勇者、元康が悠々と歩いてくる。気に入らねえな。なんかウザイ。

「お前らも波に備えて来たのか？」

俺らの事を蔑むような視線で上から下まで一瞥する。

「なんだ、お前ら。まだそんな装備なのか？」

何様だよ。この野郎。

元康のことは見てみると、防具は一目見ただけでも強そうなんかキラキラしてる装備をしていた。槍も…槍？ 矛だな、いや、矛も槍なのか？

まあいい。話すのも面倒なので無視して出ていこうとする。

しゃべるのもわずらわしい。

「何よ、モトヤス様が話しかけているのよ！ 聞きなさいよ。」

と、俺の面倒事の元凶が元康の後ろから顔を覗かせる。

これでもかと睨みつけるがソイツは相変わらず、俺らを挑発するように舌を出して馬鹿にする。

こいつ、今すぐ頭ぶち抜いてやろうかな。

いや、今はやめておこう。

「ナオフミ様？ こちらの方は……？」

ラフタリアさんが首を傾げつつ、元康たちを指差す。

「……。」

尚文は答えるよりもここを去る選択を決め歩きだそうとした。

入り口から樹と鍊がやってくるのを見つけるまでは。

「チツ。」

「あ、元康さんと……尚文さん、あとハルキさんも。」

樹は舌打ちをした俺達二人を見るなり不快な者を見る目をし、やがて平静を装って声を掛ける。

「……。」

鍊はクール気取りで無言でこちらに歩いてくる。やはり装備している物が旅立った日より遥かに強そうな物で占められている。

それぞれ、ゾロゾロと仲間を連れて。

時計台の中はそれだけで人口比率があつという間に増えた。

18人

5人は俺達、召喚された勇者で12は国が選んだ冒険者、そして1はラフタリアさんだ。

18人も居たらマジで暑がるしい。

「あの……」

「誰だその子。すつごく可愛いな」

元康がラフタリアさんを指差して言う。

こいつ、女なら何でも良いのか？

…はあ。こいつのパーティー酷いことになってそうだな。

女の醜い争いとかで。

しかも鼻にかかった態度でラフタリアさんに近づき、キザったらしく自己紹介する。

「始めましてお嬢さん。俺は異世界から召喚されし五人の勇者の一人、北村元康と言います。以後お見知りおきを。」

「は、はあ……あなたも勇者様だったのですか。」

おずおずとラフタリアは目が踊りながら頷く。

「あなたの名前はなんでしょう？」

「えつと……」

困ったようにラフタリアは尚文に視線を向け、そして元康の方に視線を戻す。

「ら、ラフタリアです。よろしくお願ひします。」

尚文がイライラしてるのが目に見えて分かる。ラフタリアさんも冷や汗を掻いてるようだ。

はあ、用も済んだし、さっさと帰りたいんだが。

「アナタは本日、どのようなご用件でここに？アナタのような人が物騒な鎧と剣を持っているなんてどうしたのです？」

「それは私がナオフミ様と一緒に戦うからです。」

「え？尚文の？」

元康が怪訝な目で尚文を睨みつける。

「…なんだよ。」

「お前、こんな可愛い子を何処で勧誘したんだよ。」

元康が上から視線で尚文に話しかけてきた。

「貴様に話す必要は無い。」

尚文もすげなくかえす。

「てつきり一人で参戦すると思っていたのに…ラフタリアお嬢さんの優しさに甘えてるんだな。」

お前は脳内花畑か。どうせまた、自分の都合がいいように、あの時と同じように解釈しているんだろう。

「勝手に妄想してろ。」

尚文も意心地悪いだろうが、俺もかなり悪い。

だって周り敵だらけだし。

俺らは鍊と樹の方にある出入り口の方へ歩き出す。

二人とその仲間は道を開ける。

「波で会いましょう。」

「足手まといになるなよ。」

事務的でありきたりな返答をする樹と、お前はえばれるほど強いのかという勇者様態度の鍊にイライラしつつ、背を向ける。

ふと振り返るとラフタリアさんがオロオロとしながら周りをキョロキョロとしつつ尚文の元へ駆け寄る。

「行くぞー！」

「あ、はい！ ナオフミ様！」

尚文が声を掛けた所、やっと我に返ったのか元気に返す。

ほんと、アイツらとはもう関わりたくない。

「尚文。俺もそろそろ行くよ。また後でな。」

「ああ、また波で。」

「ラフタリアさんも頑張りな。」

「ありがとうございます。銃の勇者様も頑張ってください。」

そうして俺はあと半日、森で道具の準備に勤しんだ。

一応ある程度終わってるけど念には念をいれて、つてやつだ。

そうして波までの時間を潰した。

波 第二波

波の時間が来た。

視界の端にある時間が00:00になった。

次の瞬間俺はいつも居る森から少し離れた小高い丘に転送されていた。

波は俺の住む森の近くで発生したようだ。

まあ、住んでた時に集めた物は全部バックバックの中だけだな。

バックバックよりサイズの大きなものがなんの抵抗もなく入っていくのは非常に違和感があったが。

そんな事を考えていると、あの三勇者が波が発生している亀裂の方へ走っていくのが見えた。

尚文達はどこだ？

少し見渡してみると、尚文達は波の近くにある村、確かにユート村だったか？に向かっているのが見えた。

なるほど。確かにどこで起こるか分からん波に対応して、避難が出来てるわけない

よな。

三勇者達と戦うのは不快感しかないし、尚文達の補助に行くか。

流石に尚文達だけじゃ手が足りないだろうし。久々に手榴弾とかも使っていこうかな。

そうと決まれば早速行動開始だ。

——村には着いたが、だいぶ悲惨だな。

城の兵士も居ないし、逃げ惑ってる音が聞こえる。

ん？尚文がなんかスキル使って敵を引き付けてる様だ。

加勢に行くかな！

「おい、尚文！今どんな状況だ！」

「ハルキか！今、俺が敵を引きつけて、その間にラフタリアが村の連中をあつちの洞窟の方に避難させてる！」

「そういう事か！分かった。俺も手伝わせてもらおう！」

「じゃあ、反対側を頼む！」

「了解だ！」

さてと、波の魔物の強さのお手並み拝見と行こうか！

「ガアルル!!」

「おっと、早速お出ましか。」

最初に出てきたのは狼の様なやつだ。

俺に飛びかかってきたが、遅いな!

俺は横に避けると同時にナイフで首をかき切った。

そのまま、少し離れたところで親子が蜂型のやつに襲われかけてたので、そこはハ
ンドガンで仕留める。

こいつも一撃か。

そのまま移動していくと、尚文が見張り台に登り、鐘を鳴らし、魔物の注意を引き
つける。そこに魔物が登ってくると、何かを流し、松明の火を付けた。

すると、登ってたやつと一緒に見張り台にも火が燃え移る。

尚文が見張り台から飛び降りると同時に俺は、手榴弾を取り出し、魔物の群れに投
げつける。

ドカーン!と爆発音が聞こえ、その場にいた魔物のほとんどが片付いた。

「尚文!大丈夫か!」

「ああ、大丈夫だが、今のはなんだ!」

「俺の武器の一つだ。爆弾だよ。それよりも、今の音聴きつけて魔物が集まってきた

たぞー！」

「ああ！くそ！アイツらボス倒すの何時まで時間かけてやる！」

尚文が愚痴つていると、横の方でこの村の村人達が魔物に挑んでいるのが見えた。

「おい！なぜ逃げない！」

俺が怒鳴ると村の連中が「皆、勇者様方をみて、思い直したんです。この村は、私たちの村です……！逃げる訳には行きません！私達も戦います！」と言った。

「なるほどな。確かにお前らの村だ。ここはお前らにも手伝ってもらおうかな。」

「分かった。避難が終わるまで戦線維持に協力してくれ。」

尚文がそう言うのと村のやつも分かったようで頷いた。

魔物の勢いが増してきた様だ。

尚文が一際デカイ鎧を着たやつから村人を庇い、吹っ飛ばされる。

俺は直ぐに向かうと、そいつの口の中に手榴弾を投げ入れた。

「そいつから離れろ！」

周りの連中が離れると丁度爆発でそいつの頭が吹っ飛んだ。

俺がそいつを倒したのもつかの間さっきのと同じやつが

もう一体出てきやがった。

尚文がそいつの攻撃を防ぐと叫んだ。

「こいつは無理だ！お前たちは下がれ！」

「無理な相手からはちゃんと逃げろ！」

「ですが…。」

「家族が居るんだろ！こんなところで無駄死になんかするんじゃない！」

「ナオフミ様！」

「ラフタリア!?任せたぞ！」

尚文がでかいやつへの攻撃を弾き、盾で殴り視界を遮る。

その瞬間、ラフタリアさんが一気にトドメを刺した。

「よくやった。」

すると村人たちが「すごい。」「スゴすぎる。」と口々に言った。

「ここは任せて、早く避難を！」

「はい。勇者様たちもどうかご無事で。」

村人たちが避難すると俺たちは敵に向かい合った。

その直後、村の周りから光の様なものが飛んできた。

「くそ！まさか！おい！早く隠れろ！」

そう言う俺は近くに落ちていた、木の板で頭を覆い、降ってきたものを防ぐ。

尚文達も尚文が盾でしっかり防いだようだ。

やっぱりか!

すると、城のやつらが「一気に焼き殺せたな。」とか言いながら歩いてきやがった。「盾と銃の勇者か。頑丈な奴らだな。」

なるほど。俺達諸共か! やつてくれるな。

次の瞬間、ラフタリアさんが尚文のそこから飛び出し、騎士団の一人に刃を向けた。

「ナオフミ様達がいると知ってて! 返答次第では許しませんよ!」

「抜剣。」

騎士団の一人が言うのと一気に剣を抜いた。

「盾の勇者の仲間か。」

「私はナオフミ様の剣! 無礼は許しません!」

「亜人風情が王国騎士団に逆らうつもりか?」

「守るべき民を蔑ろにして! 何が騎士ですか!」

「ラフタリア。もういい。」

「ですが!」

「やめろ!」

「そうそう、大人しくしていれば我々も間違えずに済む。」

はっ、最初から当てる気だっただろうが。

「そうだな。このままお前達が魔物のエサになるのも悪くないかもなー」

すると、騎士団の後ろにいたモンスター達が一斉に襲いかかってきた。

「ここで名誉の戦死を遂げるか？　ラフタリア！」

「はいー！」

ここでラフタリアさんが一気にモンスターを片付けた。

「いいか！俺たちが時間を稼ぐ！その間に陣形を整えろ！ラフタリア、ハルキ、行くぞー！」

「はい。」

「OK。じゃあ始めるか！」

俺たち3人で襲ってくる魔物を片っ端から倒していく。

すると、騎士団のクソ野郎が「ここは盾と銃に任せて、我々は歳入者のもとへ向かうぞー！」とか言いやがった。

「どんだけ自分勝手なんだよ！クソ野郎共が！」

すると、もう1人の隊長らしきやつが「盾の勇者と銃の勇者を援護する！密集陣形！」と言った。

「密集陣形！」

すると、騎士団の半分も陣形を作り、魔物を撃退していく。

しばらくすると、ようやく空が明るくなっていった。

「ナオフミ様、空が……！」

尚文も気付いたように空を見上げる。

——村の魔物を全て倒しきった頃。

「勇者様！ありがとうございます！盾の勇者様と銃の勇者様が来てくれなかったら、今頃みな助かってなかったと思います。」

「なるようになったただけだろ。」

「そうだな。」

「いえ、貴方がいたから私達は生き残ることができたんです。」

「このご恩は決して忘れません。」

「勝手にしろ。」

尚文がそう言うのと村人たちは俺らに頭を下げ、戻っていった。

尚文とラフタリアさんの方を見るが、そっちも今は話しかける雰囲気じゃなさそう
だ。

「そろそろ俺は帰ろうかな。」

俺はそう呟くと、再び、森へ戻っていった。

バイオハザード編

ラスコール街

俺は尚文達と別れたあと、すぐに旅に出た。

この国の宗教、三勇教が俺を嵌めた可能性をしまったからだ。

あれから1週間、俺は今寂れた村に訪れていた。

俺が道なりに歩いていて、たまたま見つけたから寄っただけで深い意味は無かったが。

強いて言うなら、この付近で三勇教の有名な場所で情報収集する為の聞き込みだ。

「なあ、あんたら、この付近の街で三勇教が盛んな場所って知らないか？」

「ああ、それならラスコール街がオススメだよ。」

「ラスコール街はこつから東に行くところぞ。」

「なるほど。じゃあそこに行ってみようかなあ。」

すると、年老いた老人が「あんた、ラスコールに行くのかい？」と聞いてきた。

「ああ、そのつもりだが。」

「やめといた方がいいと思うよ。」

「どうしてだ？」

「最近、あの街では猟奇殺人が起きているんだよ。」

「は？ 猟奇殺人？」

「なんでもね、人が食い殺されたって言うんだ。最初は魔物かなにかだと、思ったらしいんだけどね、喰われた時に着いた歯型が人間のものだったんだらしいと聞いたよ。」

「爺さん、そんな事起こるわけないだろ。この前俺たちがラスコールに行った時ものもなかったんだから。気にし過ぎだろ。」

「…なんかすごいフラグっぽい気がするんだが。余計なこと考えるのはやめとこう。」

「ありがとう。俺はその街いる時は気をつけるよ。」

「じゃあ、さようなら。」

俺は村から出るとラスコールに向かって歩き出した。

————2日後の夜、ようやくラスコールに着いた。

街に着いたんだが、なんで誰もいないんだ？

これじゃ、盗賊とか来ても対応出来ないんじゃないか。

とりあえず、街に入ってみようか。

：しばらく歩いたのに人っ子一人居ないのはなぜだ？

というか、静か過ぎないか？

いや、こんな大きな街だ。きつと、ギルドかなんかでドラゴンとか倒した祝いで、焼き肉食べ放題パーティーとかでもやってるんだらう。そうだな。そういう事だろ。

ん？なんか倒れてる人を発見！ようやく人を見つけた。というか、倒れてる？
とりあえず、助けよう。

「なあ、あんた、大丈夫か？」

そう言いながら近づくと地面に血が広がっているのに気づく。

「おいおい！大丈夫か!？」

俺は横たわったまま動かない男の胸に耳を当てる。

しかし、何も音が聞こえない。心臓が動いてない。

「クソっ!」

俺は急いでだいぶ前に学校で習った心臓マッサージを繰り返す。

しかし、何度やっても脈は戻らなかつた。

すると、路地の方から誰かが歩いてくる。音からして2人。

「おい！誰か！誰か来てくれ！！人が死んでる！」

歩いてくる音に期待して、振り向くと大柄な男と若い女性がこっちに来ていた。しかし、様子がおかしい。

彼らの様子を確認してみると首周りの部分には血がついていた。

「え？」

驚き、呆然としている間にも、ゆっくりと確実に近づいてくる。

もしかして、こいつらが、あの村の人が言ってた、人食いの正体…？

「動くな！ここで生まれ！止まらないと撃つぞ！」

俺はそう言つて、銃をそいつらに構えた。

しかし、一向に止まる気配がない。

警告として、足元に撃つ。

「これが最後だ！止まらないとほんとに撃つぞ！」

それでも止まらない。

覚悟を決めて、心臓の辺りに面倒狙いを定め、撃つ。

「嘘だろ!!」

それは心臓を撃つても、一瞬立ち止まったが、また歩き出す。

「!？」

革製のブーツを履いていた足に何かが噛み付く。

見ると、さつき確実に死んでいた男がブーツに噛み付いていた。ただブーツは分厚かった様で足自体は無事だった。

咄嗟に頭を撃つと動かなくなつた。

…頭？頭を撃つて動かなくなる人型の怪物を俺は一つだけ知っていた。

ゾンビ。それを理解すると、俺は一気に状況を理解した。

「マジかよ。ゾンビなんて、そんなん異世界とかでしかありえないだろ！つてこゝ、異世界だったわ。」

すると、銃声を聞きつけたのか、更に数えることすら面倒くさくなる数のゾンビが押し寄せてきた。

「クソ！」

俺は直ぐに路地に入り、移動を開始した。

すると角で武器屋を見つけた。

急いで武器屋に入り、戸を閉める。

「動くな！」

俺が戸を閉めた瞬間、声が聞こえた。

「撃つな！俺は人間だ！」

「そうか、済まなかった。もう、生きてるのは俺だけかと思つたてたよ。」

生きてるやつによやく会うことが出来た。しかも銃もあった。

「ここで、一体何が起きてるんだ？」

俺が武器屋の店主に聞くが

「分からない。気がついたら街が、皆がゾンビになって襲つてきた。しかも、こんな状態になつた直後、魔法が一切使えなくなつた。」

「魔法も？一体なぜ？」

「分からない。」

「というか、なんで銃があるんだ？」

「この街はフォーブレイに近いからあつちから銃が流れてくるんだ。」

「そういう事か。」

そう言うと、武器屋の店主は鍵をかけに、ドアへ向かつた。

しかし、鍵をかけた直後、ガラス張りの窓を破壊し、ゾンビが武器屋の店主に掴みかかつた。

「ぐああああああああ!!」

「「ヴァア」」

「店主！」

直ぐにゾンビの頭を撃ち抜くも、既に店主は事切れていた。

「店主……。すまない、この武器、借りてくぞ。」

そういい俺は伝説の武器以外の剣と銃を持った。

しかし、何故か銃以外の武器は持てなかった。

すると、視界の端にヘルプが浮かんでくる。

ヘルプ……。伝説の武器と同じ武器種以外の武器は使用する事が出来ません。

マジかよ。でも、銃だったらいいんだ。

それに気づき俺は伝説の武器以外の銃と銃弾も一応回収した。

そして、店を後にした。